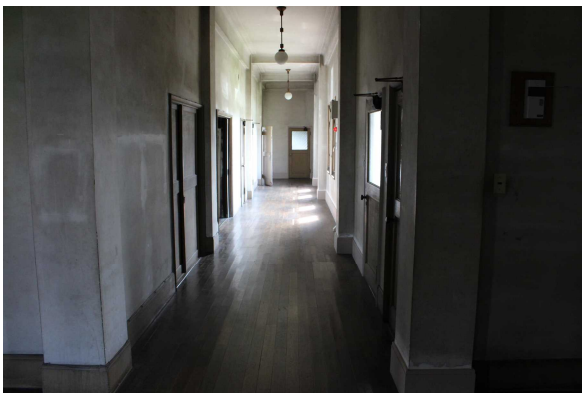


国登録有形文化財「坂田医院旧診療所」 メヌマポマード発祥の地「井田記念館」 解説資料

国登録有形文化財「坂田医院旧診療所」



1. 登録年月日

平成16年(2004)7月23日

2. 所在地

熊谷市妻沼1420番地

3. 概要

坂田医院旧診療所は、産科医院として昭和6年(1931)に建てられ、構造は鉄筋コンクリート造、平屋建て、床面積は216.72㎡で、玄関ポーチを付け、正面側をスクラッチタイル貼りとする洋風近代建築である。

用語解説

鉄筋コンクリート造: 鉄筋コンクリートを用いた建築の構造もしくは工法に由来している。英語の Reinforced-Concrete (補強されたコンクリート) の頭文字から RC 構造と呼ばれる。

平屋建て: 1階建て構造の建物。平屋造り。

玄関ポーチ: 建物の玄関前に構成される、壁から突き出た庇(ひさし)のある入口空間。入口の外観デザインにおいて西洋風の趣を与えることが多い。

スクラッチタイル: タイルの表面を櫛引きして平行の溝を作り、それを焼成した粘土タイル。その模様から簾レンガと呼ぶ。《scratch+tile》

4. 平面

各部屋は、玄関ホール、受付・調剤室、応接室、待合室、診察室、分娩室、手術室、給湯室、レントゲン室、暗室、便所からなり、主要な部屋を正面側に並べた続き間とするとともに、背面を明かりの差し込む廊下とした機能的な配置となっている。なお、以前は北側に病棟、西側に主屋、北西に新病院があり、渡り廊下で結ばれていた。

5. 外観

外壁は、直線を基調とした歯形の凹凸装飾で、玄関ポーチに持ち送りを付けるなど、昭和初期のモダンスタイルの意匠を見せる。

6. 内部

内部は、壁・天井とも plaster 仕上げで、蛇腹は各部屋の意匠を変える。待合室には簡素ながら天井飾りも付ける。造作材は床のフローリング・腰羽目板・建具・柾木、いずれも南洋材と見られる木材を用いる。照明器具はアールデコの影響を感じさせる意匠で、ペンダントやブラケット、乳白色ガラスグローブなど当初のものが残る。いずれも華美なものではないが、当時の流行を取り入れた端正なデザインでまとめられている。

用語解説

plaster 仕上げ: 鉱物質の粉末と水を練り合わせた塗壁の仕上げ方法。坂田医院の場合、石膏を主材にした「石膏 plaster」の様式である。
蛇腹: 建物の軒や壁の最上部などに帯状に巡らした、割形(くりかた)のある部分。

腰羽目板: 建築物の壁における板張りの一種で、同一平面に張った板を。板を張る方向によって横羽目と縦羽目と称される。

アールデコ: 1910年代から30年代にフランスを中心に流行した美術工芸の様式。単純・直線的なデザインが特徴。世紀末の アール・ヌーヴォーは植物などを思わせる曲線を多用したのからの変容。

ブラケット: 機械部品同士を結合するための支持具・取付け金具。

ガラスグローブ: ガラス状の照明カバー

井田記念館

7. 評 価

当該建造物は、昭和50年代前半まで使用されていたが、近年、維持管理のため窓をアルミサッシに取り替えるとともに、屋根防水工事も行われたため保存状況は良好である。基本的には、これまでに改造もなく建設当初の状態を残しており、昭和初期の地方近代建築の貴重な遺構である。

また、タイル貼りの手術室や特殊な照明装置が残るレントゲン室など、各部屋の機能的な特徴も見られ、病院建築の遺構としても興味深い。

街道に面する敷地正面の引きを広く取り、玄関ポーチへのアプローチやスクラッチタイルを用いた瀟洒な外観を見せる洋館は、建設当初、妻沼町の家並みにおいて、医業とともに街に近代化のシンボリックな存在であったといえよう。

坂田医院旧診療所の建築概要と経過

昭和6年(1931)に坂田康太郎氏が産科医院として建造した「坂田医院旧診療所」は、鉄筋コンクリート造、平屋建て、外壁正面をスクラッチタイル貼りとする明治初期の地方近代建築の貴重な遺構として平成16年に国登録有形文化財となった。康太郎氏は開業の傍ら町議会議員として活躍、その後、息子である晃氏、孫の早苗氏に引き継がれ、現在は熊谷市(旧妻沼町)が購入し、現在に至っている。

外壁のスクラッチタイルとは、タイルの表面を楕円引き平行の溝を作り焼成した様式のことであり、その模様から簾(すだれ)レンガとも呼ばれている。室内には、受付・調剤室、応接室、待合室、診察室、分娩室、手術室、レントゲン室などが残されており、主要な部屋を正面側(東側)に並べ、背面(西側)には外光が差し込む廊下を配置している。

内部は、壁・天井ともに、鉱物質を原料とした塗り方法であるプaster仕上げが用いられ、柱や天井の隅などに巡らした蛇腹(じゃばら)と呼ばれる帯状の構造は、各部屋ともに意匠を凝らしている。床には檜材が、床と壁とのつなぎ目には松材が多用されている。天井には端正な形状を重視するアールデコ様式の照明器具が当時のまま残されている。

外壁の上部には、直線を基調とした菌型の凹凸装飾が見られ、玄関ポーチの両脇にはかつて幾何学的な石膏レリーフがはめ込まれていた。

現在、この建物は映画やドラマなどの撮影場所として使用されるなど、全国的な知名度を上げている。平成24年度には保存修理工事が実施された。



建物の概要

メヌマポマードの創始者で元衆議院議員の井田友平(1889-1965)の住まいであった主屋を昭和32年(1957)に旧妻沼町に寄贈された。元来、井田家は弥藤吾にあり、寄贈時に現地へ移設された。建造物としては、明治時代初期の建立と伝わり、その後に屋根などの改修が行われた。

平屋建ての瓦葺きであり、庇の上には銅板葺きの屋根が配されている。東側に玄関を設け、西側の部分では南に突出し建物全体としてL字の構造を形成している。南側の縁側には廊下があり、ガラス窓が連なり配置されている。

内部には茶室として使用できる畳敷きの部屋が配置され、炊事場などの部屋もあり、当時の生活様式を彷彿とさせる印象を受けるものである。

主屋の南側には昭和33年に建立された井田友平先生像が置かれている。当初、この碑は弥藤吾の氷川神社に建立されていたが、平成に入り当地の庭園整備を機に移設された。

人物紹介

井田友平(1889-1965)

明治22年3月17日、旧弥藤吾村生まれ。幡羅高等小学校卒業後、上京、石鹼雑貨商の見習いとなり、明治43年に独立。大正6年純植物性の「メヌマポマード」の製造、販売を開始し、一時国内の75%のシェアを占める。東京都会議員を経て、昭和21年、衆議院議員に当選(日本自由党)。後に、埼玉県妻沼町に井田育英会を設立し、地域の文化振興や慈善事業を進めた。昭和40年10月31日死去。76歳。

